

クラフティア

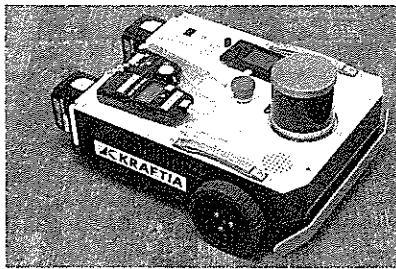
クラフティア(旧九電工)は4月から施工物件の室内照度を自動測定する2種類のロボットの運用を始めた。従来の人手の作業より測定時間を約25%短縮でき、報告書の作成も省力化できるといふ。電気工事現場の人手不足に対応する。

導入したのはゼネコンなどの企業連合「建設RXコンソーシアム」に参画して共同研究したロボットと、九州大学と共同開発したロボットの計5台。施工現場の依頼に応じて活用する。

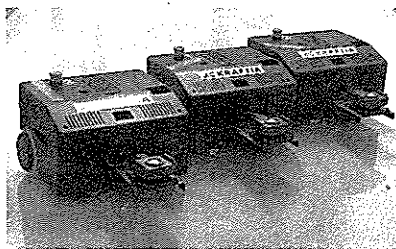
建設RX版ロボは自律走行用の高性能センサー「LiDAR(ライダー)」を搭載。図面を基に指定地点に移動し、照度を測定する。担当者2〜3人で手動計測するより時間を約25%減らせるという。データはクラウドサーバーを経由してやり取りし、測定の進捗はメールで確認できる。

九大版ロボは複数台を同時に運用でき、測定工

ロボで照度測定 運用開始



建設RXコンソーシアムで共同開発した照度測定ロボット(写真上)。九大と開発したロボは複数台同時に運用できる



倉庫や事務所で活用する予定だ。測定データは施主などに渡す報告書にそのまま活用でき、担当者が帳票に記入する手間を減らせる。2026年度は全国の物流施設など20件程度の活用を目指す。

リアを自動で分割してそれぞれの照度を測定する。室内全体のきめ細かい照度データが求められる美術館のような施設にも対応できるといふ。両機種ともロボット掃除機のような見た目で、建設RX版は幅約40センチ、奥行き約50センチ、高さ約25センチ。1万5000平方メートルの部屋の照度を約80分で測定できる。最大3000平方メートルの物流倉庫や高層オフィスビルなど大型物件での使用を想定する。

作業時間を25%短縮

ロボット導入により担当者が他の業務に集中でき、夜間の残業時間も減らせる。労務負担の軽減は電気工事の発注元のゼネコンや自治体に対する訴求力になるとみている。電気工事の現場では施工担当も管理担当も人手不足が深刻になっていては担当者が測定器を載せた台車を移動させ、測定地点で機材を床に置いて測る作業を繰り返すため、現場の省力化の仕組みづくりは急務になっていく。

(大淵将一)